

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *kriḍāpanaka-* について

西 康 友

1 はじめに¹⁾

これまで筆者は、梵文「法華経」(SP) 中央アジア系カシュガル出土写本(O)の伝承の実像を文献学的に検証するため、このローマ字校訂本である戸田本(Th)を底本として訳注研究を行ってきた²⁾。最近は第3章「三車火宅の譬え」の読解に注力しているが、これはSPのうち第3章が古層と見做されることによる³⁾。Thと『ケルン・南條本』(Kn)を比較対照しながら訳注研究を進めたところ、「遊び道具」を意味する語に2つの語形が存在することに気づいた。すなわち、中期インド・アーリヤ語(MIA)的な語形と考えられる *kriḍāpanaka-* と、古典期 Skt. 語形 *kriḍanaka-* である。

このことは既に辻がSPの言語状況を検討した際に指摘している⁴⁾。ただし辻は気づいた限りの語形を列挙しているが、検討範囲はSP第3章に限っている。筆者はさらに進んで、SP全章に亘り検討したところ、この2語形の出典箇所分布に特徴的な偏りがあることを見出した(→表1)。

辻が指摘するように、Oには多くのMIA的な語彙・語形・語法等が散見される。一般にMIA的要素は古典期 Skt. 的要素よりも古く、Skt. 化される以前の要素の残存と見做されている⁵⁾。本稿はTh(≒O)とKnにおける *kriḍāpana(ka)-* / *kriḍana(ka)-* の出典・分布状況を精査し、法華経成立・伝承過程の解明に資する一視座を得ることを目指す。

第2章では、このMIA的な語形 *kriḍāpanaka-* と古典期 Skt. 語形 *kriḍanaka-* の出典・分布状況箇所を精査する。まず、『マハーバーラタ』

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *krīḍāpanaka-* について（西）
 (MBhār)、『シャクンタラー姫物語』(Śak) を例にとり、通常の Skt. 文献の用例を見る。次に Th と Kn における *krīḍāpana(ka)-* / *krīḍana(ka)-* の 2 語形の用例を以下の 5 つに分類した：① Th と Kn 対応箇所がともに *krīḍāpana(ka)-* である用例 (→2. 1節)；② Th *krīḍāpana(ka)-* に対する Kn 対応箇所が *krīḍana(ka)-* である用例 (→2. 2節)；③ Th *krīḍāpanaka-* に対する Kn 対応箇所の語彙がない用例 (→2. 3節)；④ Th と Kn 対応箇所がともに *krīḍana(ka)-* である用例 (→2. 4節)；⑤ Kn *krīḍāpita-* の用例 (→2. 5節)。これらについては以下で議論する。2. 1-2. 5節の分類に従って、O (≡ Th) と Kn における *krīḍāpanaka-*、*krīḍanaka-* の出典・分布状況を検証し作表した (→表 1)。

第 3 章では、以上の検討から得られた知見に基づき、法華經成立・伝承過程の解明へ向けての研究方針を検討する。

2 *krīḍāpanaka-*、*krīḍanaka-* の出典・分布状況

Th および Kn の用例検討に入る前に、通常の Skt. 文献での用法を確認する。通例、Skt. 文献では *krīḍanaka-* を用いる (PW II 502)。例えば MBhār には一貫して *krīḍanaka-* が用いられている：

MBhār III 220,20 *yāni krīḍanakāny asya devair dattāni vai tadā /*
*tair eva ramate devo mahāseno mahābalaḥ //20//*⁶⁾

「その時、神々が彼に与えた遊び道具たちなるもの、他ならぬそれらによって偉大な力をもつ神マハーセーナは楽しんだ。」

MBhār III 31,36 *saṃprajoyya vijoyjāyaṃ kāmākāra karaḥ prabhuh /*
krīḍate bhagavan bhūtair bālāḥ krīḍanakair iva
//36//

「繋ぎ合わせては引き離し、有能な者（主宰神）は望みのことをなす。あなたさま、(彼は) 生き物たちを用いて遊んでいるのです。幼児が遊

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *krīḍāpanaka-* について（西）
び道具を用いて、のように。」

MBhār XII 171,21 *aho nu mama bākiśyaṃ yo 'haṃ krīḍanakas tava /*
kiṃ naiva jātu puruṣaḥ paṛeṣāṃ pṛeṣyatām iyāt
//21//

「ああ何と、私は愚かなことか。私は君の遊び道具なのだ。そもそも、
人は、他の者たちの奴婢たる状態にいかないことがあるのか。」
この他には、例えば Śak にも *krīḍanaka-* が用いられている：

Śak 295,2 // *iti krīḍanakam ādatte //*

「と [言って]、少年は遊び道具を取る。」

Śak 287,5 *abaraṃ de kīlanaaṃ daiṣṣaṃ /*
(āparaṃ te krīḍanakam dāsyāmi /)

「私は君に、他の遊び道具をあげましょう。」

Śak 295,2はト書きの部分である。Śak 287,5は女中の台詞であって Pkt.
で書かれているが、*kīlanaaṃ* の背後には古典期 Skt. 語形 *krīḍanakam* が想
定される。

以上に見たように、通常の Skt. 文献では *krīḍanaka-* のみを用いる。

他方、通例、Pāli 文献では *kīḷāpanaka-*⁷⁾ (<**krīḍāpanaka-*) を用いる。
BHS 文献では、特に古層に属するとされる『マハーヴァスツ』(Mv) 散文
に *krīḍāpanaka-* の用例が8例見られる。⁸⁾ SP では Th 偈文・散文、および
Kn 偈文にも用例が確認される（後述）。恐らく *krīḍāpanaka-* の使用は、そ
の文献の MIA 的性質を示唆するものである。

2.1 Th と Kn 対応箇所がともに *krīḍāpana(ka)-* である用例

Th に *krīḍāpanaka-* があり、そこに対応する Kn の箇所が *krīḍāpanaka-*
である用例は、以下の偈文のみに見られる：

(2. 1-1a) Th III 98a3f. *yadā ca narakebhya cyutā bhavaṃti*

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *kriḍāpanaka-* について（西）

tīrya(g)gatau te punar eva yānti ·

śvā=^[4]nā(h) śrgālā(ś) ca bhavaṃti

durbalāḥ pareṣa kriḍāpanakā bhavanti (7)7(=115)

「そして、彼らがナラカ [地獄] から移動した場合には、彼らは再び、畜生の境涯に行く。力が弱い者たちは、犬たちやジャッカルたちとなる。他のものたちの遊び道具たちとなる。」

(2. 1-1b) Kn III 94,5f. *yadā ca narakeṣu cyutā bhavanti*

tataś ca tīryakṣu vrajanti bhūyaḥ /

^[6]*sudurbalāḥ śvānaśrgālabhūtāḥ*

pareṣa kriḍāpanakā bhavanti //115//

「そして、彼らがナラカ [地獄] に移動した場合には、彼らは重ねて、そこから畜生 [の境涯] に赴く。極めて力が弱い者たちは、犬たちやジャッカルたちとなる。他のものたちの遊び道具たちとなる。」

この d 句 *pareṣa kriḍāpanakā bhavanti* については、Th も Kn も同一の読みを示す¹⁰⁾（→表 1 *kriḍāpanakāḥ*）。

また同様の用例として、*kriḍāpana-* の例を 1 箇所数えることができる：

(2. 1-2a) Th III 92b3f. *śṛṇoti ca eti te a=^[4]tra aurasā ·*

kriḍāpanai · kṛṇḍaratīṣu mattā ·

te atra kṛṇḍaṃti ramaṃti paricārayaṃti cā=^[5]pi

yathā 'pi bālā avijānakās ca (2)5(=63)

「彼は聞きそしてやって来る。『ここで、我が愛しの息子である彼らは、[個々の] 遊び道具たちによって遊ぶ楽しみに酔いしれている。彼らは、ここで、遊び、喜び、楽しんでいる - [物を] 識りもせず、幼童のように』[と]」。

(2. 1-2b) Kn III 86,5f. *śṛṇoti cāsau svake atra putrān*

kriḍāpanaiḥ¹¹⁾ kṛḍanasaktabuddhīn¹²⁾ /

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *kriḍāpanaka-* について（西）

*ramanti te kriḍanakapramattā*¹³⁾

yathāpi bālā avijānamānāḥ //63//

「そして、彼はここで、自分の息子たちが、[個々の] 遊び道具によってその知性が遊びの虜となっていることを聞く。『彼らは遊び道具に夢中となって喜んでいる－幼童が [物を] 識りもしないでいるように』
[とも]]

この箇所には Th・Kn ともに b 句に *kriḍāpanaiḥ* が存する。SMS 写本群の上掲並行句は Th・Kn と等しく *kriḍāpanaiḥ* と読むが、bc 句の読みを大きく違える。b 句では、Th は *kriḍaratīṣu mattā* とする一方、Kn は *kriḍanasaktabuddhīn* とする。

Kn は c 句に *kriḍana-* の読みを持つが、*kriḍāpana-* と *kriḍana-* の 2 語形が共存する詩句は、Kn / SMS 写本群の中では III 63 のみで、特異な用例である。c 句では、Th は *kriḍanti ramanti paricārayanti* の定型句を用いているが、Kn は *ramanti te kriḍanakapramattā* と類義語の反復を避けた表現となっている。

2.2 Th *kriḍāpana(ka)-* に対する Kn 対応箇所が *kriḍana(ka)-* である用例

Th に *kriḍāpana(ka)-* があり、そこに対応する Kn の箇所が *kriḍana(ka)-* である用例は散文に限り、以下の10の用例がある：

(2.2a) Th III 79a4f. *yāni yāni ca teṣāṃ kumārakānām* ^[5]

kriḍāpanakāni bhaveyur

「そして、彼ら坊ちゃんたちに、それぞれ (*yāni yāni*) 遊び道具たち (*kriḍāpanakāni*) があるだろうが (*bhaveyur*)」

(2.2b) Kn III 73,15f. *teṣāṃ ca kumārakānām anekavidhāny*

anekāni ^[74.1] *kriḍanakāni bhaveyur*

「そして、彼ら坊ちゃんたちに、多種・多様な遊び道具たちがあるよ

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *krīḍāpanaka-* について（西

うに。」

これと同一な用例（Th *krīḍāpanakāni* に対する Kn 対応箇所 *krīḍanakāni*）が5つ（Th III 79b2 (74,3) ; 80b4 (75,4) ; 82a6 (76,10) ; VII 154b3 (160,11) ; 154b5 (160,12)）が見られる。

また、同様な用例は4つ（Th III +77b4 ¹⁴⁾*krīḍāpanakai* (72,13 *krīḍanakaiḥ*) ; 89a5 (82,2)、III 79b6 *krīḍāpanaheto* (74,6 *krīḍanahetoḥ*) ; 80a1 *krīḍāpanakānām* (74,8 *krīḍanakānām*) ある（カッコ内は Th の Kn 対応箇所）。

以上の用例箇所を通覧すると、ほぼ一貫して O (≒ Th) 散文は *krīḍāpana* (*ka*)- を、Kn 散文は *krīḍana*(*ka*)- を用いていることが分かる（→表1）。この例外が1つ存するが、これは2.4節で扱う。

2.3 Th *krīḍāpanaka-* に対する Kn 対応箇所の語彙がない用例

Th に *krīḍāpanaka-* があり、そこに対応する Kn の箇所に期待される *krīḍanaka-* の語がない用例は散文に1箇所のみ見られる：

(2.3) Th III 79b4f. *yān yusmākam iṣṭāni kāntāni priyā=¹⁵⁾ṇi*
manāpāni sarvāṇi tāni krīḍāpanakāni mayā bahir
niveśanadvāre upasthāpitāni

「君たちにとって望みの、愛おしく、好ましく、意に合うものである、そういうすべての遊び道具たちは、私によって屋敷の門の外に配置されている」

Kn III 74,5f. *yāni bhavatām iṣṭāni kāntāni priyāṇi manaāpāni*
tāni ca mayā ¹⁶⁾sarvāṇi bahir niveśanadvāre
sthāpitāni

「貴殿たちにとって望みの、愛おしく、好ましく、意に合うものである、そしてそういうすべては、私によって屋敷の門の外に配置されて

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *krīḍāpanaka-* について（西）
いる」

加えて O (=Th) を除き、SMS 写本群の当該箇所には *krīḍāpanakāni* が存しない (SMS III 206) (→表 1 Th 散文 *krīḍāpanakāni*)。すなわち、上掲箇所に *krīḍāpanakāni* の語を持つのは O (=Th) のみである。SMS 写本群は Kn と同様の読みを示し、Kn とともに「遊び道具 (*krīḍāpanaka-* ないし *krīḍanaka-*)」の語を欠いている (SMS III 206)。O (=Th) *krīḍāpanakāni* は孤立している。

2.4 Th と Kn 対応箇所がともに *krīḍana(ka)-* である用例

Th とそこに対応する Kn の箇所がともに *krīḍana(ka)-* である用例は、以下の偈文と散文に 1 箇所見られる：

(2. 4-1a) Th III 93a3f. *te codayaṃtā iti bālabuddhayaḥ*

kumārakāḥ krīḍanakaiḥ pramattāḥ

na ^[4]*centayaṃti pītaraṃ bhaṇantaṃ*

na ca teṣa taṃ duḥkha manasmi bhoti ·(30) (=68)

「彼らは教導されつつあった、とはいえ知性が幼くて、坊ちゃんたちは遊び道具たちに夢中である。彼らは父が話すことを考えない。そして彼らには、その苦は、思考の中に生じないのである。」

(2. 4-1b) Kn III 87,1f. *te codyamānās tatha bālabuddhayaḥ*

kumārakāḥ krīḍanake pramattāḥ /

^[87.2]*na cintayante pītaraṃ bhaṇantaṃ*

na cāpi teṣāṃ manasīkaronti //68//

「彼らは教導されているのに、そのように知性が幼くて、坊ちゃんたちは遊び道具に夢中である。彼らは父が話すことを考えない。そして彼らには、意識することもないのである。」

この用例は偈文である。Th も Kn もともに *krīḍanaka-* であるが、性・数

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kriḍāpanaka-* について（西）¹⁶⁾ が異なっている。Th 偈文が古典期 Skt. 語形 *kriḍanaka-* を用いるのは、この 1 箇所だけであるが、MIA 的な語形 *kriḍāpanaka-* を用いていないことについては一考を要する。

また散文中に 1 箇所のみ以下の用例がある：

(2. 4-2a) Th XVIII 347b5f. *yadi vā sudharmāyāṃ de=^[6]va(sa) bhāyāṃ devānāṃ tr(āyastriṃśānāṃ) dyānabhūmiṃ^[7] niryāti krrīḍanā(ya)*

「あるいはスダルマーの神々の集会所から三十三天の遊園に遊ぶために出かける場合には」

(2. 4-2b) Kn XVIII 361,4f. *yadi vā sudharmāyāṃ devasabhāyāṃ devānāṃ^[5] trāyastriṃśānāṃ dharmāṃ deśayantāṃ yadi vadyānabhūmau niryāntāṃ kriḍanāya^[17] /*

「あるいはスダルマーの神々の集会所から三十三天の教えを説きつつあるのを、あるいは遊園に遊ぶために出かけつつあることを」

この箇所を除く Th 散文はすべて *kriḍāpana(ka)-* のみを用いる（→2. 2 節）。*kriḍana-* を用いる当該箇所は異例である（→表 1 Th 偈文 *kriḍanakaiḥ*；Kn 散文 *kriḍanake*；*kriḍanāya*）。

2.5 Kn *kriḍāpita-* の用例

Kn には、一例のみであるが、*kriḍāpita-* が在証される：

(2. 5) Kn XVII 347,5f. *ime khalu sattvāḥ sarve mayā kriḍāpitā ramāpitāḥ sukhaṃ jivā=^[6]pitāḥ /*

「これら衆生たちを、すべて私は遊ばせ、喜ばせて、安楽に生かせたのだ。」

Th に対応箇所は見出せず、これは Kn 独自の要素である（→表 1 Kn 散

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kriḍāpanaka-* について（西）
文 *kriḍāpitā*）。

古典期 Skt. であれば、通例 $\sqrt{kriḍ}$ の caus. には *kriḍayati* が用いられ、その過去分詞形は *kriḍita-* が期待される。これは古典期 Skt. に限らず、叙事詩 Skt. においても同様である。¹⁸⁾

ところが上掲引用箇所では、Pāli *kiḷāpeti*¹⁹⁾ に相当する *kriḍāpayati* に基づく過去分詞形 *kriḍāpitā-* が用いられている。

Skt. 文献では、管見の限り Rām に一例のみ、以下の用例が見出せる：
Rām VII 32,18 *bṛhatsālapratikāśaḥ ko 'py asau rākṣaseśvara /*

narmadām rodhavad ruddhvā kriḍāpayati yoṣitaḥ //18//

「高いサーラ樹に似ている、この者は一体誰なのか、羅刹の王よ。ナルマダー川を堰のように堰止めて、娘子 (*yoṣit-*) たちを遊ばせている。」

Kn XVII 347,5 *kriḍāpitāḥ* や Rām VII 32,18 *kriḍāpayati* は古典期 Skt. 的な語形ではない。上掲の2用例の背景には、MIA 的な言語状況が存したと考えられる。上に挙げた Kn と Ram の引用箇所には、背景の MIA 的な言語状況が反映していると推定される。

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kriḍāpanaka-* について（西）

表 1. Th / Kn における MIA 的な語形 *kriḍāpana(ka)-* / 古典期 Skt. 語形 *kriḍana(ka)-* 出典箇所一覧。表中の（ ）内は本稿の出典用例箇所である。

分類	語形	Th 偈文	Th 散文	Kn 偈文	Kn 散文
MIA 的な語形	<i>kriḍāpanaiḥ</i>	III 92b4 (2. 1-2a)		III 86,5 (2. 1-2b)	
	<i>kriḍāpanakāḥ</i>	III 98a4 (2. 1-1a)		III 94,6 (2. 1-1b)	
	<i>kriḍāpanakāni</i>		III 79a5 (2. 2a); 79b2; 79b5 (2. 3); 80b4; 82a6; 89a5; VII 154b3; 154b5		
	<i>kriḍāpanakaiḥ</i>		III *77b4 (Oに 存しない)		
	<i>kriḍāpanakānām</i>		III 80a1		
	<i>kriḍāpanaheto</i>		III 79b6		
	<i>kriḍāpitāḥ</i>				XVII 347,5 (2. 5)
古典期 Skt. 語形	<i>kriḍanake</i>			III 87,1 (2. 4-1b)	
	<i>kriḍanāya</i>		XVIII *347b7 (2. 4-2a)		XVIII 361,5 (2. 4-2b)
	<i>kriḍanakāni</i>				III 74,1 (2. 2b); 74,3; 75,4; 76,10; 82,2; VI 160,11; 160,12
	<i>kriḍanakaiḥ</i>	III 93a3 (2. 4-1a)			III 72,13
	<i>kriḍanakānām</i>				III 74,8
	<i>kriḍanakeṣu</i>			III 87,5	
	<i>kriḍanasaktabuddhīn</i>			III 86,5 (2. 1-2b)	
	<i>kriḍanahetoḥ</i>				III 74,6
<i>kriḍanakapramattā</i>				III 86,6(2. 1-2b)	
<i>kriḍāp- / kriḍana(ka)-</i> 数		2/1	11/2	2/3	0/12

上表より Th では *kriḍāpana(ka)-* が、Kn では *kriḍana(ka)-* が頻出することがわかる。

kriḍāpana(ka)- は Th に13箇所（偈文に2箇所、散文に11箇所）、Kn に

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *kriḍāpanaka-* について（西）

2 箇所（偈文のみ）に存する。Kn 散文に例外的に *kriḍāpitāḥ* が 1 箇所にある。また *kriḍana(ka)-* は Th に 3 箇所（偈文に 1 箇所、散文に 2 箇所）、Kn に 15 箇所（偈文に 3 箇所、散文に 12 箇所）に在する。また、表 1 の最後の行は *kriḍāpana(ka)- / kriḍana(ka)-* 数を示しているが、明らかに Th (MIA 的な語形 *kriḍāpana(ka)-*) → Kn (古典期 Skt. 語形 *kriḍana(ka)-*) へと遷移していることがわかる。

3 おわりに

SP 中央アジア系カシュガル出土写本（特に第 3 章「三車火宅の譬え」）に類出する *kriḍāpanaka-* は、Pāli *kiḷāpanaka-* に相当する MIA 的な語形である。この語形は、Mv 散文や O (= Th) 散文・偈文、Kn 偈文で散見され、Kn 散文では全く存在しない（→2. 2 節）。

Th III 98a3f. に対応する Kn III 94,5f. の偈文 d 句は *pareṣa kriḍāpanakā bhavanti* であり、SMS 写本群は *pareṣu kriḍāpanakā bhavanti* の読みを示し、両者はほぼ一致する。当該箇所は、恐らく O を含む SMS 写本群が共通して現存の形を採っていたと考えることができよう。

一方、Th III 92b3f. に対応する Kn III 86,5f. の偈文では Th・Kn ともに b 句に *kriḍāpana-* を、Kn は c 句に *kriḍanaka-* を持つ。これは *kriḍāpana-* と *kriḍanaka-* の 2 語形が同一偈文中に見られるという特異な用例である。なお、この他に SMS 写本群でも Kn と同様 b 句に *kriḍāpana-* と *kriḍana-*、c 句に *kriḍanaka-* が見られる。このうち *kriḍāpanaiḥ* の箇所については、韻律を考慮して MIA 語形のまま伝承したのではないかと考えられるが、これらの現象がいかなる事情を示唆するものかについては、容易に判断を下すことはできない（→2. 1 節）。

また Th III 93a3 *krriḍanakaiḥ* と Kn 対応箇所 III 87,1 *kriḍanake* は、韻律を考慮して、より望ましい古典期 Skt. 語形を用いたと考えられる（→2. 4

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kriḍāpanaka-* について（西

節）。

2. 4節に論じた Th XVIII 347b7 ⁺*krrīḍanāya* = Kn XVIII 361.5 *kriḍanāya* は興味深い。Th 散文が古典期 Skt. 語形 *kriḍana-* を用いるのはこの箇所のみである。SMS 写本群でも Kn *kriḍanāya* と読む（SMS IX 98）。Th（≡ O）の他の散文では一貫して MIA 的な語形 *kriḍāpana(ka)-* が用いられる（→2.2節）ことを想起すると、当該箇所前後の編纂過程において他の箇所とは違った事情が存した可能性が考えられる。換言すれば、当該箇所前後は他の箇所より新しく、より古典期 Skt. に近い言語で編纂されたとも考えられよう。

MIA 的な語形 *kriḍāpana(ka)-* と古典期 Skt. 語形 *kriḍana(ka)-* の出典箇所について作表したところ、以下の3つが明らかとなった：① Th では *kriḍāpana(ka)-*、Kn では *kriḍana(ka)-* が頻出する；② *kriḍāpana(ka)-* が Th 散文・偈文、Kn 偈文に表出している；③ Th *kriḍāpana(ka)-* → Kn *kriḍana(ka)-* へと「遊び道具」を意味する語形が遷移している（→表1）。

以上のことから、Mv や SP がもともと MIA 的言語状況下に編纂され、中央アジア系伝本には全体的に、ネパール・チベット系伝本（O を除いた Kn の読みに概ね等しい）には偈文部分に MIA 的要素が強く残存する一方、ネパール・チベット系伝本散文は伝承過程で MIA 的要素を Skt. 化してきた、という作業仮説が考えられよう。

O が独自に MIA 化したと想定するのは困難である。Kn XVII 347.5 *kriḍāpitāḥ* は、O（≡ Th）に対応のない、Kn 独自の MIA 的要素である（→2.5節）。古典期 Skt. としては異例な形が二次的に混入したというより、恐らく *ramāpita-*、*jivāpita-* とともに、SP が本来、Pali 語に類するような MIA 的な言語状況下に編纂された事情を示唆すると考えると矛盾が少ない。

本稿は O と Kn における *kriḍāpanaka-* 語形のみを検討しただけに過ぎな

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kriḍāpanaka*- について (西)

い。今後は O だけでなく SP 諸写本全体に亘って、他の語彙・語形も一語ずつ詳細に検討する必要がある。辻をはじめとする先行研究を念頭に置き、O に見出される MIA 的な語形・語彙・語法等を詳細に検討することで、SP の言語状況の実態を明らかにし、SP 編纂史の解明のための新知見を得るべく、検討を進めていきたいと考えている。

略号

- A (= R) MS. of No. 6, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London, Paper. (Kn の底本).
- abl. ablative.
- acc. accsative.
- AN R. MORRIS ed., *The Aṅguttara-Nikāya I-III*, The Pali Text Society, London 1885-1897, repr. 1961-1976; E. HARDY ed., *The Aṅguttara-Nikāya IV*, The Pali Text Society, London 1899, rpt. 1979.
- AsP P. L. VAIDYA, ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, Buddhist Sanskrit Texts No. 4*, Darbhanga 1960.
- B MS. of Or. 2204, British Museum, London, Palm-leaf (Kn の底本).
- Buddhacarita E. H. JOHNSTON ed., *Aśvaghōṣa's Buddhacarita or Acts of the Buddha*, Motilal Banarsidass, Lahore 1936, rpt. Delhi 1984.
- BHSD F. EDGERTON, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, Motilal Banarsidass Publishers, Delhi 1953.
- BHSG F. EDGERTON, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, Motilal Banarsidass Publishers, Delhi 1953.
- BHSGB BHSG, *Bibliography and Abbreviations*, xxv : BHSG §1. 40 with n.16 など。
- Ca MS. of Add. 1683, Cambridge University Library, Cambridge, Paper (Kn の底本).
- causative caus.
- Cb (= C5) MS. of Add. 1684, Cambridge University Library, Cambridge, Paper (Kn の底本).
- Cone M. CONE, *A Dictionary of Pāli I*, The Pali Text Society, Oxford 2001.
- D S. WATANABE ed., *Saddharmapūṇḍarika, Manuscripts Found in Gilgit, Pt. II, Romanized Text*, Tokyo 1975.
- DT N. DUTT ed., *Saddharmapūṇḍarikasūtram, with N. D. Mironov's Read-*

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *kriḍāpanaka-* について (西)

	<i>ings from Central Asian MSS. Bibliotheca India, A Collection of Oriental Works, Work No. 276, Issue No. 1565, Calcutta 1953.</i>
Dbh	P. L. VAIDYA ed., <i>Daśabhūmikāsūtra, Buddhist Sanskrit Texts No.7, Darbhanga 1967.</i>
DOP	R. DAVIDS and W. STEDE eds., <i>The Pali Text Society's Pali-English Dictionary, The Pali Text Society, London 1921-5.</i>
gen.	genitive.
Jā	V. FAUSBØLL, ed.: <i>The Jātaka I-VII, Together with its Commentary being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha, The Pali Text Society by Messrs. Luzac & Co., London 1962-64.</i>
K	E. KAWAGUCHI's MS. held in the Tōyō Bunko, Tokyo (河口慧海将来本 : Kn の底本).
Kn	H. KERN and B. NANJIO eds., <i>Saddharmapuṇḍarīka, Bibliotheca Buddhica X, St. Pétersbourg 1908-12 (『ケルン・南條本』).</i>
LV	H. LEFMANN, ed., <i>Lalitavistara 1902 : Critical Apparatus 1908 : abbreviated Lefm. : transl. FOUCAUX, Annales du Musée Guimet 6, and Notes 19 : Tibetan version (partial), with transl., by FOUCAUX, Paris 1847.</i>
M	DT's notes.
m.	masculine.
MBhār	<i>Mahābhārata, Parvans I-XVIII, Electronic text (C) Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune, India 1999 on the basis of the text entered by M. TOKUNAGA et al., revised by J. SMITH. Cambridge, et al.</i>
MIA	Middle Indo-Āryan (中期インド・アーリヤ語).
MN	V. TRENCKNER ed., <i>Majjhima-Nikāya I, The Pali Text Society, London 1888 ; R. CHALMERS ed., Majjhima-Nikāya II-III, The Pali Text Society, London 1896-1899.</i>
MS.	manuscript.
Mv	E. SENART ed., <i>Le Mahāvastu, Imprimerie Nationale, Paris 1882, 1890, 1897.</i>
n. (No.)	notes.
n.	neuter.
O	L. CHANDRA ed., <i>SADDHARMA-PUNḌARĪKA-SŪTRA Kashgar Manuscript, Śata-piṭaka Series 229, Tokyo 1976, rpt. The Reiyukai 1977 (中央アジア系カシュガル出土 SP 写本写真版) (Kn の底本).</i>
Pkt.	Prakrit.
pl.	plural.
PW	O. BÖHTLINGK und R. ROTH, <i>Sanskrit-Wörterbuch, St. Pétersbourg</i>

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kriḍāpanaka*- について (西)

	1855-1875, rpt. Delhi 2000.
Śak	M. WILLIAMS ed., <i>Śakuntalā, A Sanskrit Drama, In Seven Acts by KĀLIDĀSA, The Deva-nāgarī Recension of the Text, Edited with Literal English Translations of All the Metrical Passages, Schemes of the Metres, and Notes, Critical and Explanatory</i> , 2nd ed. Oxford 1876.
s.	see.
Skt.	Sanskrit.
SMS	Z. NAKAMURA, K. TSUKAMOTO, R. TAGA, Y. KURUMIYA, Z. ITO, K. MITOMO and R. MITOMO eds., <i>SANSKRIT MANUSCRIPTS OF SADDHARMAPUṆḌARĪKA, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia</i> , Compiled by Institute for the Comprehensive Study of Lotus Sutra, Rishso University, Published by Publishing Association of Saddharmapundarika Manuscripts, Tokyo III (1978), IX (1981) (中村瑞隆監修・塚本啓祥・田賀龍彦・久留宮圓秀・伊藤瑞叡・三友健容・三友量順編『梵文法華經写本集成』第3巻、第9巻)
SMS 写本群	中央アジア系カシュガル出土 SP 写本 (O) を除く SMS が集成した全 SP 写本 (SMS III Abbreviations vii:K, C ₁₋₆ , B, R, P ₁₋₂ , T ₂₋₉ , A ₁₋₃ , N ₁₋₃ , D ₁₋₃ , F, M)。
SP	<i>Saddharmapuṇḍarīka</i> (梵文「法華經」)。
Th	H. TODA ed., <i>Saddharmapuṇḍarikasūtra, Central Asian Manuscripts, Romanized Text</i> , Tokushima 1981.
Vkn	大正大学総合佛教研究所梵語佛典研究会編『梵文維摩經—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』、大正大学出版会 2006年。
v.l.	variant reading (s) (異読)。
W	MS. in the possession of the late Mr. WATTERS, formerly British Consul in Formosa (Kn の底本)。

参考文献 (略号および脚注に示した以外の論文・文献)

- (1) 辻 [1970]: 辻直四郎「法華經の言語」(金倉圓照編『法華經の成立と展開』(法華經研究 III)、平楽寺書店 1970年 3-21)。
- (2) カーリダーサ作・辻直四郎訳『シヤクンタラー姫』、岩波書店 1977年。
- (3) 伊藤瑞叡・塚田貫康・村上征勝・五十嵐信彦編『梵文法華經荻原・土田本総索引』、勉誠社 1993年。
- (4) 上村勝彦『原典訳マハーバーラタ』4 (2002年)・7 (2003年)、筑摩書房 (ちくま学芸文庫 マ-144, 7)。
- (5) 平岡 [2012]: 平岡聡『法華經成立の新解釈—仏伝として法華經を読み解く—』、大蔵出版 2012年。
- (6) 西 [2013]: 西康友「中央アジア系写本の梵文「法華經」訳注研究—Upamā-parivarta

中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kriḍāpanaka*- について (西)

- 」『中央學術研究所紀要』第42号、2013年 73-82。
- (7) 西 [2014] : 西康友「中央アジア系写本の梵文「法華經」訳注研究—Upamā-parivarta (2) —」『中央學術研究所紀要』第43号、2014年 145-159。
- (8) R. DAVIDS and E. CARPENTER eds., *The Dīgha-Nikāya I-III*, The Pali Text Society, London 1890-1911.
- (9) EDGERTON [1953] : F. EDGERTON ed., *Buddhist Hybrid Sanskrit Reader*, Motilal Banarsidass Publishers, New Haven 1953.
- (10) BROUGH [1954] : J. BROUGH, 'The language of the Buddhist Sanskrit texts', BSOAS 16, 1954, 353, 367.
- (11) R. L. TURNER, *A comparative dictionary of Indo-Aryan languages*, London 1962-1966.
- (12) HOERNLE [1961] : R. HOERNLE's Ms. Remains, Oxford 1961, 161-162.
- (13) WAYMAN [1965] : A. WAYMAN, 'The Buddhism and the Sanskrit of BHS', JAOS 85, 1965, 111-115.
- (14) Y. EJIMA ed., *INDEX TO THE SADDHARMAPUNḌARĪKASŪTRA —Sanskrit, Tibetan, Chinese— Fascicle I-XI*, The Reiyukai 1985-1993 (江島惠教編『梵藏漢 法華經原典総索引 I-XI』、法華經原典研究会、靈友会)。
- (15) Y. OUSAKA, M. YAMAZAKI and K. R. NORMAN compiled, *Index to the Vinaya-Piṭaka*, The Pali Text Society, Oxford 2001.
- (16) M. YAMAZAKI, Y. OUSAKA, K. R. NORMAN and M. CONE compiled, *Index to the Dīgha-Nikāya*, The Pali Text Society, Oxford 2003.
- (17) M. YAMAZAKI and Y. OUSAKA compiled, *Index to the Majjhima-Nikāya*, The Pali Text Society, Lancaster 2006.
- (18) E. FAURÉ, B. OGUIBÉNINE, M. YAMAZAKI and Y. OUSAKA compiled, *Mahāvastu-Avadāna Word Index and Reverse Word Index, Philologica Asiatica Monograph Series 25*, Chuo Academic Research Institute, Tokyo 2009.
- (19) S. KASAMATSU, Y. KAWASAKI, M. YAMAZAKI and Y. OUSAKA compiled, *Index to the Saṃyutta-Nikāya*, The Pali Text Society, Bristol 2010.
- (20) Y. NISHI, S. KASAMATSU and Y. OUSAKA compiled, *Saddharmapuṇḍarika Pāda Index and Reverse Pāda Index, Philologica Asiatica Monograph Series 27*, Chuo Academic Research Institute, Tokyo 2011.
- (21) S. KASAMATSU, Y. NISHI, Y. KAWASAKI and Y. OUSAKA compiled, *Index to the Milindapañha*, The Pali Text Society, Bristol 2013.
- (22) S. KASAMATSU, Y. KAWASAKI and Y. OUSAKA compiled, *Index to the Aṅguttara-Nikāya*, The Pali Text Society, Bristol 2014.

注

- 1) 本稿は日本印度学仏教会第65回学術大会パネル発表A「内陸アジアにおける法華経の展開」での筆者の会場コメント内容を詳説したものである。コメント及び論文発表の機会をお与えくださった望月海慧・身延山大学教授に感謝申し上げる。
- 2) 西 [2013]、西 [2014]。
- 3) 諸研究者はほぼ一致して SP 第3章が古層に属すると理解する。この点、SP 成立史研究の論点を要約した最新の研究も参照されたい (平岡 [2012: 23f.])。
- 4) Kn 74,1 *kriḍanakāni*: O (and v.l. apud Kn) *kriḍāpanakāni* = M. (D. p. 55, n. 2); but *kriḍanaka-* without v.l. 74,8-9, Kn 75,4 (: M.°*ḍāpanakāni*, s. D. 56 n. 3), Kn 76,11 (辻 [1970: 11f.])。
- 5) 辻 [1970: 5, n. 5] によると、古典期 Skt. よりも Pkt. が古い要素であると提唱する研究者は HOERNLE [1961] であり、EDGERTON [BHSG] もこれに賛同する。EDGERTON の見解を擁護する比較的に新しい論文 (WAYMAN [1965]) もあるが、こうした見方に反対し、その極端な適用を警戒する研究 (BROUGH [1954] など) もあるので注意が必要であるとする。
- 6) このほかに MBhār III 215,23 ; VII 75,20 など。
- 7) MN I 266,14 *kiḷāpanakāni* ; MN I 384,14 ; 24 ; 29 *kiḷāpanako* ; MN I 384,18 ; 385,1 *kiḷāpanako* ; AN V 203,15 *kiḷāpanakāni*。ほか DOP 217r、BHSD 197l、Cone 697r を参照。
- 8) Mv II 434,1 *dārakakriḍāpanakāni* ; II 434,2 ; 3 *kriḍāpanakam* ; II 475,7 *kriḍāpanakāni* ; II 479,15 ; 17 ; 488,20 ; III 16,3 *kriḍāpanako*。他方 *kriḍanaka-* の用例は存しない。なおお付言すれば、他の初期大乘経典 (AsP、Vkn、Dbh) や LV、Buddhacarita に *kriḍāpana(ka)-*、*kriḍana(ka)-* の例は見られず、本稿の検討に寄与しない。
- 9) EDGERTON は *cyavati* が Skt. では (彼の知る限り Pāli でも) abl. を取ると説明する。但し、時折 loc. を取ることもあるとし、Kashgar (BHSG XXVIII) では abl. を取ると注意がある (BHSD 234r には用例として当該箇所を挙げている)。
- 10) Kn の脚注が、O は *pareṣa* とする一方、それ以外の写本は *pareṣu* と読むということには注意が必要である。このことは、O を除く SMS の集成的全 SP 写本 (SMS 写本群) が *pareṣu kriḍāpanakā bhavanti* (ただし D₁、F、M の欠損を除く) と読むことに一致する (SMS III 473)。
- 11) SMS 写本群 (F、M は欠損) も *kriḍāpanaiḥ* と読む (SMS III 367)。
- 12) Kn の脚注に異読を示す : A は *kriḍanaśaktabuddhin* ; B と Cb は *kriḍanaraktabuddhin* ; K と W は *kriḍanasaktabuddhin* と読むとある。SMS 写本群 (F、M は欠損) のうち P₃、T₂₈ は K、W と同一句 ; C₁₋₆、P₁₋₂、N₁₋₃、D₁₋₃ は B、Cb と同一句 ; A₁₋₃ は *kriḍanakaprasaktān* と読む (SMS III 367)。
- 13) Kn の脚注に異読を示す : 写本は *kriḍanakapramatān* と *kriḍanakapramattān* があり、O が異なるとある。SMS 写本群は *kriḍanaka-* (F、M は欠損) と読む (SMS III

中央アジア系写本の梵文「法華経」における *kriḍāpanaka-* について (西)

368)。

- 14) O 77b4に *kriḍāpanakaiḥ* の語は存しない。しかし Th は Kn を参考にしつつ、当該対応箇所 *kriḍāpanakaiḥ* を挿入している。
- 15) Th (= O) は *yān* とあるが、文脈上理解しがたい。ここでは O の誤写と考え、Kn *yāni* を参照して ⁺*yāni* と理解した。
- 16) SMS 写本群のうち O を含む17写本が^s *kriḍanakaiḥ*、B, R, T₄₅, T₈, A₂が^s *kriḍanaka*、T₉が^s *kriḍanakam* と読み、C5, N3, F, M は欠損である (SMS III 373)。
- 17) SMS 写本群のうち K, C_{1-2,4,5}, B, R, P_{1,2}, T_{2,9}, A_{1,3}, N_{1,2}, D_{1,3}の当該箇所には *kriḍanāya* が見られ、C_{3, 6}, A₂, N₃, F, M では欠損である (SMS IX 98)。
- 18) Cf. PW II 501. 例えば MBhār I 158,4 *kriḍayan striyaḥ* ; IV 12,4 *kriḍayām āsa pāṇḍavaḥ* ; I 128,9 *āsrame kriḍitaṃ yat tu* ; III 145,43 *kriḍitāny amaraḥprabhāḥ* など。
- 19) Cf. DOP 217r., Cone 696r. 例えば Jā II 142,27 *samḥparivattakādikiḷaṃ kiḷāpeti* ; VI 458,12f. *gāmanigamādīsu kiḷāpento bārāṇasiyam uggasenarañño santike kiḷāpetvā* など。

〈謝辞〉

逢坂雄美氏（仙台高等専門学校名誉教授）と笠松直氏（仙台高等専門学校准教授）の両氏から本稿に多くのご教示を頂いた。心から感謝申し上げます。